少しく無秩序のうちに秩序のある

―ケーベル文庫とその保存修復について―

Tohoku University Library's Koeber Collection and its Conservation

小川　知幸

はじめに

それまで数年間手がけていた漱石文庫の保存修復にある程度のめどがついたとき，「そうだ，ケーベル文庫の目録を作らねば」と思いたった。ケーベル文庫とは，ラファエル・フォン・ケーベル（Raphael von Koeber, 1848-1923）の旧蔵書であり，昭和 17 年（1942）3 月に東北大学附属図書館に収められたものである。その翌々年の昭和 19 年には夏目漱石の旧蔵書が漱石文庫として受け入れられ，両文庫は，旧附属図書館（現在の東北大学史料館）の一室に書架を並べた。漱石が，明治 44 年（1911）に発表した小品「ケーベル先生」のなかで,「文科大学へ行つて，此処で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら，百人の学生が九十人までは，数ある日本の教授の名を口にする前に，まづフォン・ケーベルと答へるだろう」などと書いていることはよく知られている。当時の図書館長であった小宮豊隆が両文庫を招き，それらは附属図書館を代表する二大文庫となった。

現在のケーベル文庫は，附属図書館二号館 1 階の準貴重書庫に収められ（写真 1），貴重図書に指定された漱石文庫とは階を隔てている。とはいえ，漱石文庫のつぎに重要な文庫はケーベルをおいて他にないと思われた。また，同文庫には，昭和 18 年に作成・頒布された謄写版の目録しかなく，その部冊もいまやわずかで，ほとんど人目に触れない現状では，文庫の全貌を知ることはむずかしいと考えたのである。そこで，平成 22 年（2010）1 月より，文学研究科ヨーロッパ史専攻の大学院生，青柳寛俊氏の助けを借りて，新しい目録の作成を開始した。

しかし，平成 23 年 3 月 11 日，東北地方太平洋沖地震によって附属図書館の大量の蔵書が落下・破損したために（写真 2），目録作りはいったん中断し，現在にいたるまでそれらの修理・修復のための作業を中心に進めざるをえなくなった。さいわいにしてケーベル文庫は，準貴重書庫の集密書架に収められていたために，書架のあいだのすき間が小さかったおかげか，落下した冊数は漱石文庫にくらべてもきわめて少なかった。このほど平成 24 年 12 月に，その 9 点 10 冊の保存修復を終えたので，拙論ではケーベル文庫の成り立ちを踏まえながら，個々の書籍の性格と修復のあり方を報告したい。



写真 1　現在のケーベル文庫。落下防止のためにビニールテープを巻いてある



写真 2　3.11 の地震直後の二号館のようす（小陳左和子撮影）

1. 来日まで

さて，ラファエル・フォン・ケーベルの前半生については和辻哲郎「ケーベル先生」（弘文堂アテネ文庫，昭和 23 年）に，後半生については久保勉『ケーベル先生とともに』（岩波書店，昭和 26 年）にくわしい。とくに久保は，明治 44 年より，駿河台鈴木町のケーベル邸で 3 年間起居をともにし，その後ケーベルが帰国の機会を逸してロシア総領事のもとに 9 年間の「蝸牛生活」を送り日本の土となるまで，もっとも親密に交際して多くの「証言」を残している。

ケーベルは，帝国大学文科大学で哲学，美学を講義するため，明治 26 年（1893）6 月 11 日，45 歳にして日本の地に降り立った。

1848 年，ロシアの商業都市ニジニ・ノブゴロドにおいてドイツ系ロシア人の父の家庭に生まれたケーベルは，幼いころに母を亡くしたが，聡明な母方の祖母の手で育てられ，文学や音楽に親しんだ。ギムナジウムに入学するも，生徒からは「ドイツ人，他国人」と厭われたらしく，環境になじめず中退した。その後は祖母と数人の家庭教師によって知識と教養，そして貴族的な生活態度を身につけ，19 歳のとき父の反対を押しきって創設まもないモスクワ音楽院に入学し，初代院長のニコライ・ルビンシテインからピアノを，ピョートル・チャイコフスキーから作曲を学んだ。周囲からその楽才を認められ，2 年目からは授業料も免除されたという。ちなみに，年齢の近いチャイコフスキーとは親密な交際が続けられ，後年，日本への招聘についても相談している。

24 歳でモスクワ音楽院を優秀な成績を収めて卒業したが，公衆の面前で演奏することに耐えられず，職業音楽家となることはあきらめて自然科学者をめざした。同窓のバイオリニスト，ダヴィドフとともに，ドイツの「美しい静かな田舎町」イエナに移って，反復説「個体発生は系統発生を繰り返す」で知られる生物学者で哲学者であったエルンスト・ヘッケルに師事したが，やがてショーペンハウアーの哲学に魅了され，ハイデルベルク大学に移り，そこで学位論文を仕上げた。かくもケーベルは移り気であったが，それに対して友人のダヴィドフは所期の目的をはたし，ヴィルフランシュ＝シュル＝メールのロシア生物学研究所の所長となったということである。

ショーペンハウアーの哲学を突き詰めるうちに，ベルリンの異才エドゥアルト・フォン・ハルトマンの哲学に出会った。このときハルトマンと友誼を結んだことが，ケーベルの来日を決定づけたといえる。イエナ大学の哲学教授ルドルフ・オイケンから大学教官になることを勧められるも逡巡しつづけ，その後，長くミュンヘンに引きこもっていたケーベルに対して，帝国大学の哲学教師になるよう推薦したのである。

その経緯はつぎのようであった。ドイツに留学し，帝国大学の哲学教授となった井上哲次郎(1855-1944)は，日本は科学技術のみならず精神面においても西洋に負けぬ必要があると強く感じた。そこで，当時の青木周蔵ドイツ公使をつうじてハルトマンに哲学教師の最適任者を推挙するよう依頼し，そうして白羽の矢を立てたのがケーベルなのであった。ケーベルは，長い航海がいやだとか，地震が心配だとか，英語で講義する自信がないとか，あれこれ理由を並べ立てて，ほとんど拒絶に近い返事をしたが，「彼（ハルトマン）はただ笑って相手にもしなかった。要するに，彼はあらゆるわたくしの懸念を打ち挫いてわたくしに勇気と自信とを与えてくれたのであった」。

チャイコフスキーだけが最後まで反対したが，井上の心のこもった手紙も届けられ，ケーベルはついに決意した。そして明治 26 年 4 月 30 日に日本に向けて出帆したのであった。

2. ケーベルと蔵書

9 月 15 日より 3 年間のつもりで帝国大学において教鞭をとりはじめたケーベルは，途中一度として休暇らしい休暇をとることもなく，契約を 7 回も更新し，大正 3 年（1914）年までの 21 年間を哲学，美学の教育にささげた。また，当初，音楽家であることは隠し通そうとしたが隠しきれず，翌年に鹿鳴館での慈善音楽会でモーツァルトのピアノ三重奏を，さらにその翌年には本郷慈善音楽会でリストの超絶技巧曲「リゴレット・

パラフレーズ」を披露している。明治 31 年（1898）からは東京音楽学校に出向してピアノと音楽理論を教え，その卒業生には滝廉太郎もいた。滝は明治 34 年，ケーベルの紹介状を携えてライプツィヒ音楽院に留学した。

さて，ケーベルの国内での活動については，近年では生誕 150 周年を迎えていくつかの研究文献も発表されているのでそちらに譲り，ここではケーベルの蔵書に絞って論を進めたい。生前の蔵書のようすは，その保存修復のあり方にとって重要だからである。

久保勉（1883-1972）が，27 歳のときに，いわゆる学僕（師の家や塾に住み込み，雑用を務めるかたわら学問をする者）という立場で，ケーベルの住む駿河台鈴木町の邸宅に同居するようになったのは，まだ帝国大学在学中の明治 44 年 4 月 3 日のことであった。海軍兵学校を出て少尉に任官しながらも，辞職して東京帝国大学哲学科に入りなおした異色の経歴の持ち主であったが，兵学校で英語を鍛錬し，そのおかげでドイツ語にもすぐになじんで気に入られたようである。ケーベルはすでに 63 歳であったが, その変わらぬ生活態度を，久保はよく観察して伝えている。ケーベルの蔵書を引きうけ，小宮豊隆の求めに応じて東北帝国大学にこれを譲り渡したのも久保であった。これについては後述する。

久保によれば，ケーベル邸の書斎はこんなようすであった。

「洋館の二階は，私の部屋のちょうど上が先生の寝室兼書庫で，その東隣に先生の書斎 ――先生は Studienzimmer 研究部屋という言葉が嫌いなので，いつも Arbeitszimmer 仕事部屋と呼んで居られた――があった。そこにも何一つとして装飾らしいものは無かった。ただカントの小さい肖像とベートーヴェン，モーツァルト，リスト，ワーグナーなどの小さな影絵が壁にかかっていただけである。蔵書は粗末な本棚に並べられていたが，先生の習慣として当座に読む書物はデスクや椅子の廻りに不規則に立てかけてあった。これが先生の好きな Ein wenig unordentlich ordentlich『少しく無秩序のうちに秩序のある』とでもいうものであろう。それに本棚の本の掃除があまり行き届いていなかったので，先生はそこから所要の本を引き出すと，別にいやな顔もせず本の上にたまっている埃をそのために備え付けてある手拭いで静かに拭きとってから開かれるのが常であった。書斎の中には大きなデスクと先生常用の椅子（これは非常に掛け心地のいい安楽椅子であった）の外には揃っていない椅子が二三脚と小さい丸テーブルが二つあって，あまり広くもない部屋を殆ど一杯にしていた」（旧字体，旧仮名遣いは改めた）。

つまり，蔵書の大半は寝室に備えつけた「粗末な本棚」に収められ，必要に応じて書斎に運ばれて，じゃっかん乱雑気味に机や椅子のまわりに置かれていたようである。本棚の蔵書には埃がよくたまるので，専用の手拭いが用意してあったという。

では，そこにはどの程度の蔵書があったのか。

「ケーベル先生はたしかに稀有の読書家であったがその蔵書――これについても私はよく尋ねられるのであるが――の数は大したことはなく恐らく二三千冊位のものであったかも知れない。なお蔵書の一部は出発当時ミュンヘンにいた幼友達のダヴィドフ博士に預けて来られたとの話であった。文学書類――先生は自分の立場を Zwischen Philosophie und Dichtung『哲学と文学との間』とよく言って居られたが，蔵書の上にもそれがよく顕れて居り，文学書と哲学書とは多分相半ばする位であったろうと思う――はたいてい日本へ来てから買われたものらしかった。それで先生は自分の蔵書の欠陥をばいつも大学の図書館の本を借りて来て補って居られた。先生は講義の帰りにはよく図書館へ立ち寄って沢山の書物を借り出して来られた」。

大雑把な記憶といえるが，2 〜 3 千冊の蔵書に，なかにはドイツから持ち込まれたものもあったようである。おそらくその中心は哲学書で，文学書については日本で購入し，やがて数では哲学書と拮抗するほどになった。ただし購入するだけでなく，図書館から借り出して読むことも多く，その意味では，蔵書は読書傾向を必ずしも反映していないだろう。

「なお先生の蔵書の一般的特徴とも言うべきは豪華版というようなものの一つも無かったことである。書物の内容については選り好みのあった先生も製本や印刷や紙質などに対しては比較的無頓着であり，むしろ廉価なもので満足して居られた。例えば先生の蔵書の中のドイツ書にはレクラム版が非常に多かった。もっとも仮綴の本は嫌いであったので，私は講義のあった日にはよく大学の製本屋へ立寄らされたものである。また先生は珍書とか初版本とかいうものにも大して興味がなかった。」

同じようなことは，ケーベル邸を訪れた漱石も伝えている。

「先生の容貌が永久にみづみづしてゐる様に見えるの

に引き易へて，先生の書齋は耄(ぼ)け切つた色で包まれてゐた。洋書といふものは唐本や和書よりも装飾的な背皮に學問と藝術の派出やかさを偲ばせるのが常であるのに，此部屋は余の眼を射る何物をも藏してゐなかつた。たゞ大きな机があつた。色の褪めた椅子が四脚あつた。マツチと埃及(エヂプト)煙草と灰皿があつた。余は埃及煙草を吹かしながら先生と話をした。けれども部屋を出て，下の食堂へ案内される迄，余は遂に先生の書齋にどんな書物がどんなに並んでゐたかを知らずに過ぎた。」（「ケーベル先生」）

漱石は，明治 44 年 7 月 10 日に，安倍能成(よししげ)（1883-1966）とともにケーベル邸を訪問し，夕食をともにした。そのときの印象をみごとに表現したものが，7 月 16，17 日付の朝日新聞に掲載された「ケーベル先生」なのである。

また，これについては漱石の身辺資料「日記及断片」（東北大学附属図書館所蔵）にも当日のメモが残っているので（写真 3），一部を引用してみたい。

「晴。暑甚。朝社の會議に行く。歸つて長椅子の上でぼんやりしてゐた。五時頃車で安倍の家へ行く夫からケーベル先生の宅へ行く。御茶の水で電車を降りて先生の家の前迄來ると，高い二階の窓から先生の頭が出てゐる。烟草の烟りが見える。入口で安倍が久保君々々々と云ふ。（中略）久保君が二階へ上つて行くと，先生が高い處から降りて來た。ミスター　ナツメ，アイ　アム　グラツド　ツー　シー　ユーと云ふ。階子段の下で握手をして二階へ上る。先生の書齋は大きなテーブルがあつて本があつて古い椅子が二三脚ある。頗る古びてゐる。少しも雅な所も華奢な所もない。たゞ荒涼の感がある。」

駿河台時代のケーベルの書斎と蔵書のようすについての証言は，おそらく以上ですべてである。

ケーベルの飾らない人となりや，その学問を事物からも印象的にしめそうとした文学者の表現をそのまま鵜呑みにするわけにはいかないが，こうして久保のいくつかの証言と漱石自身のメモ，そして現在のケーベル文庫の表構えを突き合わせてみると，その蔵書がいまの雰囲気とあまり変わることなく，華やかな装丁や高価な稀覯本の収集ともまったく無縁で，ひたすらにただ読むべき必要性から集められたものであったことがわかる。ケーベル自身も，「二度読む価値のない本は総じて読むべきではない」と断言しており，要するに同文庫は，ケーベルによって集められ，読まれたことに価値を見出すべきものなのである。

ところで，冒頭に掲げた「ケーベル先生」の一文によってその人柄に相当に傾倒していたようにみえる漱石であるが，講義を受けたのは明治 26 年 9 月にケーベルが赴任した直後のみで，7 月に大学院に進学したばかりの漱石は就職活動に奔走しており，すでに 10 月には東京高等師範学校英語嘱託となっているので，ほぼすれ違いの状態であったといえる。しかし，漱石が述懐しているとおり，ケーベルの講義を受けたことはたしかで，「美学の紀源」と題した講義ノートの直筆断片を漱石文庫のなかに見ることができる（写真 4）。

再会をはたしたのは，漱石が堂々たる作家となった 44 歳のときであった。学生を集める以外にはあまり他人の訪問を好まないケーベルも，文学や音楽方面にも話題豊富で打てば響くような漱石をとても気に入った

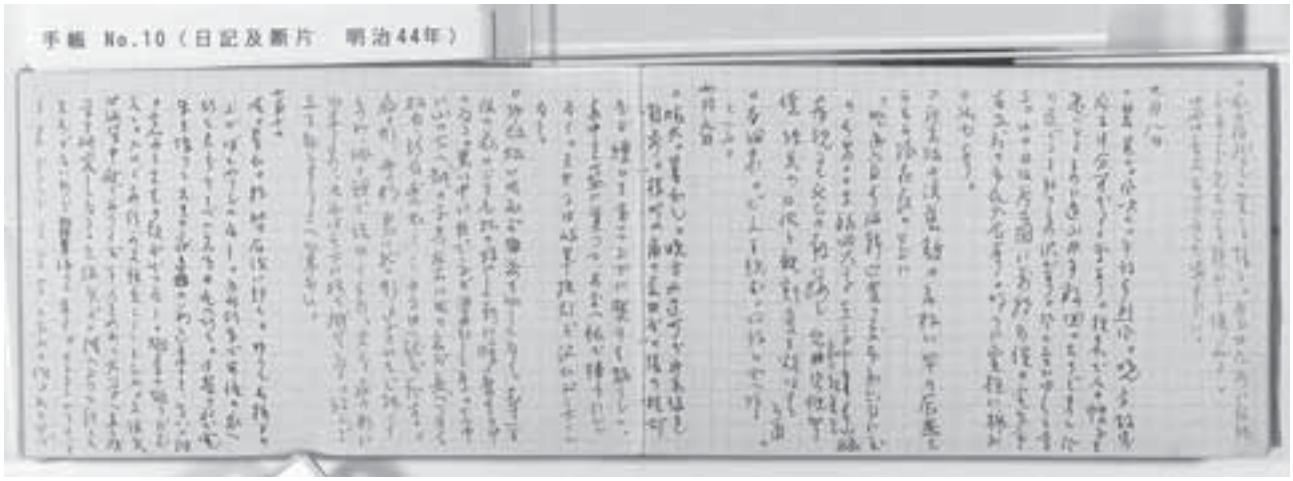


写真 3　漱石の日記。左に七月十日の日付がみえる

らしく，その後久保に向かって漱石のことを褒めちぎったという。また，漱石もケーベルの虚飾のない人柄や生活に対して温かい尊敬の念を抱いた。4 年後，ケーベルに東京帝国大学からもう契約の更新はしないとの事務的な通知が届き，いよいよ日本を去ろうというとき，「ただ簡単に自分の朋友，ことに自分に指導をうけた学生に，さようなら，御機嫌ようという一句を残して行きたいから」という理由で，漱石を晩餐に招き，その一文を依頼したのが，出帆予定の大正 3 年（1914）8 月 12 日付の朝日新聞に掲載された，「ケーベル先生の告別」であった。

しかし，けっきょく船には乗れず，その後の 9 年間をケーベルは横浜の寓居で過ごすことになったのである。

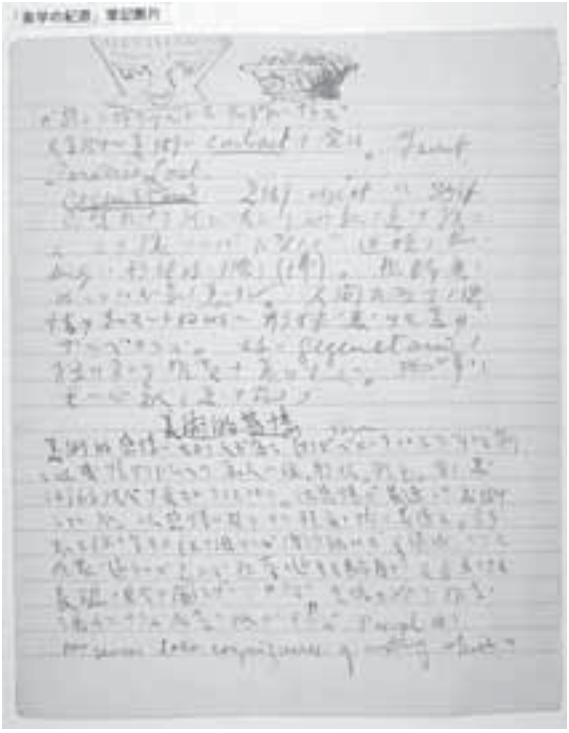


写真 4　漱石の講義ノート「美学の紀源」。落書きの人物はケーベルだろうか

3. 横浜にて

駿河台鈴木町の邸宅を引き払い，それまでの蔵書については，「一部の人々に記念として分かち与えられたものと京都大学の図書館に譲渡したものとを除けば，音楽に関するもので先生が持って帰られるつもりで残して居られたものは総べて，今は故人となった音楽上の最も忠実なる弟子の橘［糸重（いとえ），1873-1939］さんに――楽譜の相当数はこれももう亡くなった幸田（延子）さん［幸田延（のぶ），1870-1946。幸田露伴の実妹で日本初の女性ピアニスト。東京音楽学校で山田耕筰や久野久子に教えた］に――与えられたが，その他の一切は私［久保］の手に委ねられた」（［ ］内は筆者による補足）。

ただしこれは後年の証言なので，さしあたりの帰国の荷物として手許に残しておいたものもあるのだろう。それらは，仮の住まいとなった横浜駐在ロシア総領事のアルトゥール・ヴィルム（Arthur C. Wilm, 1867-1934）邸の一室にあった。「こんな訳で先生にとって必需品に属する蔵書を並べる余地とてはなかった。それは長く階下の物置にしまわれていた。もっともその一小部分は後日部屋の衣装戸棚に移された。」

久保はこう続ける。「もはや何等果たすべき公の義務もない，全然自由な身であったけれども，先生は相変わらずその極めて自然で規則正しい生活を続けられた。朝はかなり早起きであった。二杯のコーヒーとバターつきのトーストから成る朝食は先生の部屋へ運ばれることになっていた。それを摂りながら聖書とか，ヒルティー［Carl Hilty］の『眠られぬ夜の為に』とか，リュッケルト［Friedrich Rückert］の『婆羅門の智慧』とかいったような修養書を繙くのが常であった。」

ミュンヘンに戻るつもりであったが，第一次大戦勃発の直前でドイツへの寄港が危ぶまれたために出発を延期し，その後もロシア国籍のためにビザの取得に手間がかかることを知ると，ケーベルは決して焦ることもなく，「急がず，休まず」の生活を続けた。

弟子たちの発案と説得により執筆活動を開始したので，大正 8 年（1919）には，久保勉と深田康算（やすかず）共訳の『ケーベル博士小品集』がでた。大正 12 年には『続小品集』が刊行され，その大半はいまでも岩波文庫の『ケーベル博士随筆集』で読むことができる。執筆にともなって足らない文献は，やはり図書館から借り出したり，新たに購入したりしたようである。そして久保らに最期を看取られながら，大正 12 年 6 月 14 日に，その地で 75 歳の生涯を閉じた。

4. 蔵書を守る

その 3 か月後の 9 月 1 日に関東大震災が発生した。音楽関係の蔵書はどうなったのか。久保はいう。「先生の没後間もなく橘さんが神田五軒町の自宅で関東大震災に遭った時，他の品物を顧みず，何よりも先ず先生の音楽上の遺産を救い出そうとして如何に苦心したか，また後で親戚の人からそんなものよりもなぜもっと必要な衣類などを持ち出さなかったのかと言って非難されたり，笑われたりしたという話を聞かされた時，私はさすがは橘さんだと深く感心したのであった。」

また，橘は，蔵書だけでなく，ケーベルの自筆譜面も守り抜き，清書して 4 年後の昭和 2 年（1927）に謄写版で刷ったものを友人と知人とに配った。その一人が橘のピアノの弟子であった岩波百合（岩波茂雄の長女）であり，これがさらに平成 2 年（1989）になって百合の姪にあたる小松美沙子の手にわたったことで，後に譜面とそれにもとづく演奏が平成 4 年（1992）と平成 10 年に相次いで音楽之友社より出版されることになった（「9 つの歌」）。

久保もケーベルの蔵書を大切に保管した。その後ドイツに留学し，昭和 4 年（1929）に東北帝国大学文学部の古典語担当の助教授として赴任し，昭和 15 年（1940）には古代中世哲学史担当の教授となって，昭和 19 年に定年を迎えた。

「ケーベル先生のことが話題に上るとき，よく訊かれる問の一つは『先生の蔵書は今どうなっているか』というのである。（中略）一部は東北大学における私の研究室に置いて自他の用に供していたが，残部――主として独，仏，英，伊等の文学書と音楽関係のものや私の当分必要としないもの――は東京の親戚に預けていた。ところが今から六年前に預けてあった書類を引き取らねばならぬことになり，更に東京の爆撃も漸く激しくなろうとしたとき，私はそれをどこか安全な処へ移したいと考えたけれども，適当な疎開地は容易に見つからないので困惑していた。するとそれを伝えきいた小宮［豊隆］君――当時東北大学の図書館長をしていた――から大学で譲り受けてもいいと思うが，どうか，との話が出た。そこで私は考えた――隠退後は先生の遺志に従ってその蔵書を整頓し，更に出来るだけ補充もして一つのささやかな，しかし良い文庫を設け，真面目で向上的な青年学徒の用に供したいとのかねての楽しい意図を今や放棄せねばならなくなったことは逃れ難き運命とはいいながら，この上もなく心苦しく且つ言いようなく淋しく感ずるにも拘わらず，この大学の図書館の書庫ならば比較的安全であろうと考えたし，又そこでは散佚することもなく先生の遺志のように忠実に保管され『多く且つ道理あるように利用される』であろうとも信じたので，又この危急の秋他に良策も思いつかなかったので，遂に意を決して先生の全蔵書を取りまとめてこれを東北大学へ譲り渡した次第である。それから三年の後仙台に大空襲があり，大学の一部も焼けたが，幸にして図書館は無事なるを得た。これは私にとって実に有難い且つ喜ばしいことであった。」

5. ケーベル文庫の成立

このように，退官後は自分の手で蔵書を拡充しながら良質の文庫に仕上げて勉学に励む学生の利用に供したいという夢は絶たれたが，久保はみずからを説き伏せるように思いきって蔵書のすべてを大学に移譲することにした。かくて，ケーベルの蔵書 1,999 冊は，久保が在職中の昭和 17 年（1942）3 月に，8,040 円を代金として東北帝国大学の蔵書にくわえられ，一括して「特殊文庫 洋書の部 ケーベル文庫」となった。翌 18 年 3 月には謄写版の目録が刊行されている。

図書の登録番号は洋甲 127437 から 129436 までで，なぜか 129393 は欠番となっている。ちなみに，「洋甲」とは洋書で，購入されたものを指す。また，久保の記述にもあるように，まもなく仙台空襲（昭和 20 年 7 月 10 日未明に仙台市中心部を襲ったアメリカ軍による大爆撃）のために，Georg Buchmann, Geflügelte Worte der Zitatenschatz des deutschen Volkes, Berlin, 1912（洋甲 128535）および Cicero, Tusculanae disputations recognovit M. Pohlenz, Lipsiae, 1918（洋甲 129365）の 2 冊を焼失したが，ケーベル文庫における被害がこの程度にとどまったのはまったく不幸中のさいわいであった。

「ケーベル文庫」とは，したがって，ラファエル・フォン・ケーベルの生前の蔵書のすべてではもちろんないにしても，来日前に友人のダヴィドフに預けたものをのぞいてケーベル自身が携えてきた哲学書を中心に，その後国内で買いそろえた多くの文学書をくわえて，そこから駿河台鈴木町の邸宅を引きはらったときに親しい人たちや京都帝国大学附属図書館に分与したものと橘糸重，幸田延子に与えた音楽関係の蔵書や譜面を引き算して，さらに横浜時代に買い求めたものを足して，久保が継承し大切に保管していた書籍群というこ とになるだろう。

複雑な経緯で増減を繰り返したので，生涯の読書傾向の全容を解き明かすのに十分なものとはいえないが，少なくともここにあるものはすべて，ケーベル自身が読むために選りすぐり，買いそろえたものに違いないのである。

ところで，出版されたケーベルの自筆譜面とその実演を収録した CD は，平成 13 年（2001）に附属図書館に寄贈されたので，現在はこれらもケーベル文庫のなかに収められていることを付言しておきたい。

6. 蔵書の特徴

さて，ケーベルは製本や紙質などにはこだわらず，廉価なもので満足していたが，仮綴のまま（いわゆるフランス装）は好まず，久保に命じて製本しなおしていたということはすでに触れた。保存修復のための情報として，まずはこの点に留意しておこう。また，久保はこんな話をしている。

「この間ふるい教え子の一人が訪ねてくれた。その時彼は今ヴェルギリゥスの『ブコーリカー』［(Bucolica 牧歌（詩選)］を読んで居ること，そしてその本がケーベル文庫（東北大学附属図書館）のものである事を話し，又『その中に処々書き入れがしてあるが，あれは誰がしたのでしょうか』と尋ねた。『それは多分ケーベル先生の書きこまれたものでしょう』と答えると，『実は僕もそうだろうと想像してお懐かしく思っていたのです』と言った。」

さらに，こうもいっている。

「先生は自分の蔵書――図書館などから借りた書物に標(しるし)をつけたり書入れをしたりすることを一種の罪悪として非難せられたが，そして自分に真に価値ありとして愛重された書物は殆ど皆買って居られたが――には読過の際注意すべき箇処にその重要度に従って，頁の左右の余白に黒鉛筆で NB とか，縦又は斜に二本或は一本の線を引かれたが，またそれが全章節に及ぶ場合には，章を示す数字の下に線を引くとか，節の初に鉤形の標をつけるとかするのが常であった。」

ここで「NB」とは，ラテン語で「Nota bene(注意せよ)」の意であろう。それはともかく，じっさい，ケーベル文庫のなかにそれらしき書き込みを見つけるのは容易である（写真 5)。ほぼ例外なしに，うすい黒鉛筆によって書き込まれている。それはケーベルの読書と思索の痕跡に他ならず，利用や修復のさいに間違っても消してしまわぬことが重要である。さらに，ほとんどの蔵書のおもて表紙の見返し紙上部には，黒インクの力強い筆致で，「R Koeber」の自署がある（写真 6)。

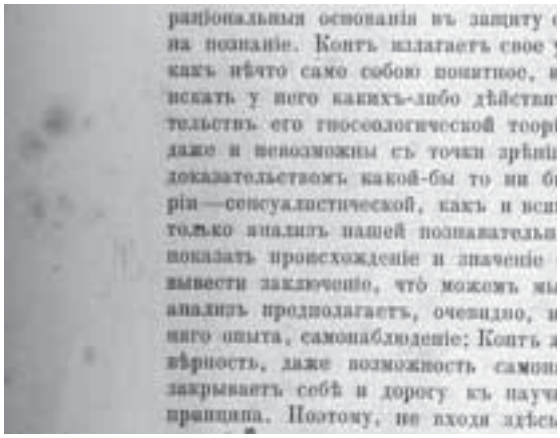


写真 5　鉛筆による書き込み「NB」



写真 6　自署「R Koeber」

それでは，これらのことを踏まえながら，今回の大地震によって落下・破損し，ようやく保存修復を終えたケーベル文庫の 9 点 10 冊について処置前の状態とその修復のあり方をみていきたい。

7. 修復前の調査

ケーベル文庫のうち，以下のタイトルが保存修復の　　対象となった。

ケーベル文庫の保存修復 9 点 10 冊

番号	タイトル	配架記号（登録番号）	書込
①	Tacite / Gaston Boissier. 3e éd., Paris : Hachette, 1908.	Ⅲ A4/11 （洋甲 129117）	
②	L'evolution créatrice / par Henri Bergson. 8e éd., Paris : Félix Alcan et Guillaumin Béunies, 1911.	Ⅱ A2-2/6 （洋甲 128618）	有
③	Histoire de ma vie Ⅳ. / par George Sand. Nouvelle éd. Œuvres complètes de George Sand. Biblithèque contemporaine, Paris : Calmann-Lévy, [n.d.]	Ⅳ B6-3/116 （洋甲 127604）	
④	Histoire de ma vie I. / par George Sand. Nouvelle éd. Œuvres complètes de George Sand. Biblithèque contemporaine, Paris : Calmann-Lévy, [n.d.]	Ⅳ B6-3/116 （洋甲 127601）	
⑤	Henrik Steffens Lebenserinnerungen aus dem Kreis der Romantik in Auswahl / herausgegeben von Friedrich Gundelfinger. Jena : Eugen Diederichs, 1908.	Ⅳ B9-1/23 （洋甲 128077）	
⑥	La marquise / par George Sand.　Œuvres complètes de George Sand. Paris : Calmann-Lévy, 1889.	Ⅳ B6-3/123 （洋甲 127610）	
⑦	Die Bibel oder Heilige Schrift. Docter Martin Luthers Uebersetzung, nach Dr. Joh. Fr. v. Meyer nochmals aus dem Grundtext berichtigt / von Rudolf Stier. 2. Auflage. Bielefeld : Verhagen und Klasing, 1859.	Ⅱ B10-2/1 （洋甲 128778）	有
⑧	Denkmäler des klassischen Altertums zur Erläuterung des Lebens in Religion, Kunst und Sitte / A. Baumeister. I. Bd.（A-I）. München ; Leipzig : Ordenbourg, 1885.	Ⅲ A8-2/1 （洋甲 128787）	有
⑨	Histoire de la philosophie européenne / par Alfred Weber. 5e éd., Paris : Fischbacher, 1892.	Ⅱ A3/34 （洋甲 128739）	有
⑩	СочиненияВ. Д.Кудряв цева-Платонова. ТомъПервый.СергиевПосад [sergiev posad: s.n.], 1893.	Ⅳ B2/8 （洋甲 127970）	有

この選定は，まったく自然の選択としかいえないが，まず落下したものがすべて破損したわけではないので，深刻な被害に遭ったものにはそれなりの物理的な理由があることが推測される。タイトルとしては，①古代史家ガストン・ボワシエの『タキトゥス伝』，②アンリ・ベルクソンの哲学書『創造的進化』，③④⑥ジョルジュ・サンドの『わが生涯の記』第 1 巻と第 4 巻および『ラ・マルキーズ』，⑤文芸史家フリードリヒ・グンデルフィンガー（グンドルフ）による『ヘンリク・ステフェンス伝』，⑦聖書，⑧古代史跡の美術書，第 1 巻，⑨アルフレッド・ヴェーバー『欧州哲学史』，⑩ロシア書などが並んでいる。うち，言語別では 6 冊がフランス書，3 冊がドイツ書である。

では，①『タキトゥス伝』の修復前の状態をみていこう（写真 7）。

これは酸による焼き目模様の装飾をほどこした緑色の板紙による装丁で，カドは黒布で補強され，背もこれと同じ黒布で留め，その上には手書きの題箋が貼付

されている。また，おもて表紙には，カドを留めた布地の上からタイトルページが貼付されており，以上のような特徴から，もともとフランス装であった書籍を，後から板紙装に造りかえたものであることがわかる。このことは，小口の高さが表紙の高さと同じであることからも証明される。表紙もろとも裁断（化粧断ち）しているのである。

また，おもて表紙に貼付されたタイトルページには，下部に小さな活字で「3 fr. 50」という価格も印刷されているので，これはオリジナルの表紙から切り取ったものだということがわかる。

損傷の具合としては，背布がその裏貼りとともに剥離して，見返し紙が切断し，折丁の綴じが露出している（写真 8）。この露出した部分には，ところどころ茶色いシミがにじんでおり，その上部と下部には，腐食した金属の留め具がみえる。ステープルである。裏貼りの紙も，この部分でとくに劣化がはげしい。

この損傷の「遠因」は，つぎのように推定される。

背にもちいた黒布が，長い時間をかけて空気中の湿気を吸収し，その湿気が，鉄製のステープルを腐食させ，サビを含んだ水分が綴じ糸や背貼りに流れ出た。これにより紙が劣化して背貼りが剥がれ，同時に背の布も強度をうしなった。このようにして，しだいに綴じが緩み，バインドする力が弱まったことで，すでに落下の衝撃に耐えることができなくなっていたのである。

その裏づけとしては，背の黒布が退色して，こげ茶色になっていることも挙げてよいだろう。水分によって染め色が流れてしまったのである。

また，ステープル留めは，その頑強さから 20 世紀の初めごろに多用された手法であり，決してめずらしいものではないが，それだけに，図書の経年劣化の重大な要因の一つとして問題視されている。ケーベルは仮綴を好まず，そうしたものは購入するとすぐに製本に出したということだが，このときの製本方法が，結果として蔵書の破損を誘発したとすれば，まことに皮肉としかいいようがない。

じつは，②『創造的進化』，③④⑥『わが生涯の記』第 1 巻，第 4 巻および『ラ・マルキーズ』，⑤『ヘンリク・ステフェンス伝』も，表紙や布の色こそ微妙に違っているが，同じ素材で同じような装丁がほどこされており，その損傷も，①とほとんど同じ状態であった。②のノドの部分には腐食したステープルがはっきりとみえている（写真 9）。④⑤においては，さらに損傷がはげしく，折丁の綴じ糸が切れて本文が真っ二つに割れ，表紙から完全に脱落していた。③では，うら表紙の見返し紙が，引きつったように左右に割れてしまっていた（写真 10）。

こうした損傷の原因も，突き詰めれば，ステープルをもちいた当時の製本にあったように思う。というのは，⑤『ヘンリク・ステフェンス伝』を例にとって，折丁の綴じ糸の切れていない部分のページを開いてみると，ノドの開きにひどく余裕がない（写真 11）。つまり，ステープルによる結合が，糸で綴じられた折丁の本来もっていた柔軟性を損なっていたのである。

しかしながら，製本方法に責任を転嫁するわけではない。ケーベルの存命中には，とくに支障なく利用できたはずのものが，数十年をかけて劣化が進行し，ついに自然災害によってそれが露呈したのである。であれば，これを補正するのは，ケーベル文庫を将来へと引き継ぐ者の責務ではないだろうか。

さて，これとは別に，⑦聖書，⑧古代史跡の美術書，⑨『欧州哲学史』の 3 冊については，出版時オリジナル



写真 7 『タキトゥス伝』修復前



写真 8　露出面にサビがにじんでいる

の装丁であった。それぞれ総革装, 布装, 板紙装であり，布，板紙装のいずれにも背革および角革がもちいられている。革素材は⑦⑧がカーフ, ⑨がモロッコ革であり，その表紙は，うつくしいマーブル紙で装飾されている。一般的にいえば，たいていの場合，装丁は内容を反映するもので，ここでは聖書の重厚さ，欧州哲学史の華やかさといった印象をそこから汲みとることができる。

損傷としては，⑦⑧では表紙と背，見返し紙の切断，また，背に落下の衝撃による裂けがあり，⑨では本文部分が表紙から完全に脱落していた（写真 12)。

このような損傷にも，同じように経年劣化が遠因として推測される。そのパターンがきわめて類似しているからである。本文の脱落が起こるのは，くるみ製本という当時の製本方法によるところが大きい（現在も同じである)。18 世紀以前の図書は，表紙と本文が綴じ糸によって（背バンドをもちいて）縫い合わせてあることが多いが，近代の装丁は，本文を表紙でくるんで見返し紙で貼り合わせている。それで，見返し紙のノドや，表紙と背の接合部分に大きな負担がかかり，開いたり閉じたりしているうちに疲労を起こすのである。

また，背貼りにもちいられた接着剤のニカワは，湿気を吸収して硬化し，剥落しやすくなる。それにより綴じが緩み，構造上の強度を保てなくなっていく。ここで衝撃を受けると，内部からあっさりと破断してしまうのである。

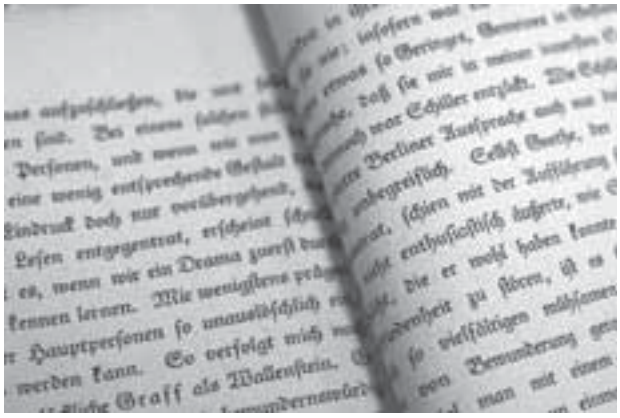
最後に，⑩ロシア書については，①〜⑥のように後付けの表紙であるが，ステープル留めではなかった。ただし，背と表紙が分離して，タイトルページが縦に裂けていた（写真 13)。酸性劣化により，紙の柔軟性がうしなわれていたものと思われる。

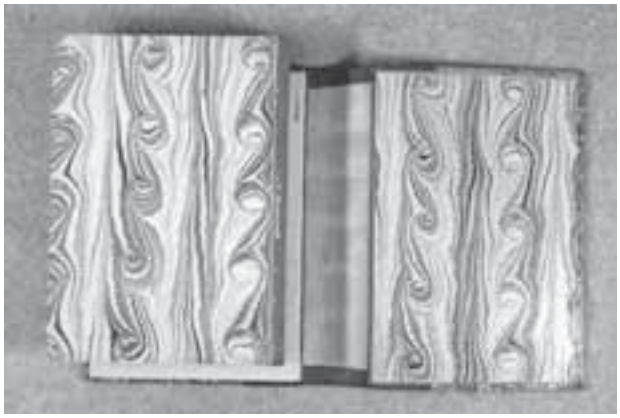
8. 保存修復



写真 9　腐食したステープル


写真 10　見返し紙が引きつったように裂けている


写真 11　ノドの開きに余裕がない


写真 12　ページが本体から完全に脱落

以上の所見から，保存修復の方針を立てることになる。保存修復とは，Conservation のことであるが，修理とは違い，修復箇所を最小限にとどめ，図書館における利用を前提としながら，同時に，数十年単位の保存のために十分な構造的強度をその資料に与えることである。もっといえば，資料の構造を転換しても，外観の変更は可能な限り回避する。具体的には，ケーベル文庫の歴史性を重視し，とくにケーベルの生前の使用痕と推定されるものはすべて残して，あるいは復元可能にして，それでいて破損や劣化につながる可能性のある要素（素材や構造など）は極力排除し，現在の最善の技術をもって強度を付与することである。

修理は外観をうつくしく仕上げてしまうが，保存修復では外観を変えることはない。本文中にある書き込みはもちろんのこと，目に見えるスレやシミも，ケーベルのものと推定されれば残すことになる。この方針は，これまで漱石文庫の修復でとってきたものと同じである。

したがって，①～⑥および⑩については，当時の製本そのものに構造的な問題があったのだが，この装丁をあえて取り替えることはせず，構造だけを，十分な強度のあるものに転換する。素材も，使用可能なものはそのまま戻して，足りない部分を新規素材で補う。劣化した接着剤などはすべて除去して，劣化する可能性の低い，除去しやすいものに置き換える。当然ステープルは抜かねばならないが，そのぶん強度と柔軟性の高い綴じを，新たにほどこすわけである。

また，⑦～⑨においても同様で，これらは装丁を変える必要はないが，もともと強度も柔軟性も高かった革の接合を再現しながら，そこに，これまで以上の耐久性を与えなければならない。

こうしたむずかしい作業を引きうけていただいたのは，株式会社 Conservation for Identity（旧アトリエ・スズキ）であった。以下の工程は，その工房でおこなわれたものである。

②を例にとると，すべての綴じをいったん外して，折丁を綴じなおし，和紙で背貼りをほどこして，その上から背と同色に染めた和紙を貼り，さらにその上にまだ使用可能な元背を貼り戻した（写真 14）。そして表紙を接合して，題箋も平滑にして貼り戻した。

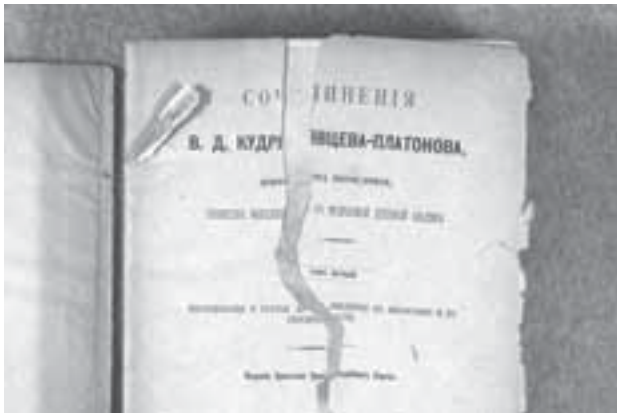


写真 13　タイトルページが縦に裂けている



写真 14　綴じ直して和紙で補強後に元背を貼り戻す



写真 15　同色に染めた革材で補強して表紙をつなぐ


写真 16　背の内側にクータを新設

革装については，総革の⑦を例にとりたい。一体であった「ひら」の部分と背とが切断してしまったので，これを再現して補強するために，同色に染めた新規の革材を背にわたして，両端を表紙の革の下にもぐり込ませ，元の背と表紙を接合した（写真 15)。背革が部分的にレッドロット（革の表面が粉状に剥がれやすくなる状態）になっていて，曲げに対する強度もとぼしかったので, それを補うためでもある。また, 重量のあるページを支え，開きをよくするために，ホローバックの背の内側に，クータ（紙のバネ）を新設した（写真 16)。

修復後のようすは，一見してどこに手を入れたかわからないようであるが，よく見ると区別できるように，精妙な修復となっている（写真 17，18，19)。しかし強度と柔軟性は，倍増しているだろう。

ところで，⑦の 716 ページと 717 ページのあいだには，針葉樹の葉のようなものが挟み込まれていた（写真 20)。いつ, いかなるときに挟まったのかは不明だが, 資料が貸し出されたようすがないことから，図書館の利用者のしわざではないのだろう。漱石が庭先の草花をしおりにしたように，もしかしたらケーベルにもそんな仕草があったのかもしれない，ということでそのままページのあいだに残してある。

なお，いずれも修復後は，フェーズド・ボックスとよばれる専用設計の中性紙の保存箱に収め，保管のさいの安全度を高めている。

むすびにかえて

このようにして，ケーベル文庫の 10 冊は，地震で落下し，破断した悲惨な状態から，ケーベルが書斎の隣の寝室兼書庫の書架からとり出し，手拭いでていねいに埃を拭きとってページを開き，鉛筆を片手に書き込みをしながら読んだ，あのときの面影を，ほぼとり戻すことができた。



写真 17　修復後の『創造的進化』



写真 18　修復後の聖書



写真 19　裂けたタイトルページを接合



写真 20　ページのあいだに葉が挟まっていた

この修復は，東北大学における復興予算の一部をつかっておこなった。したがって，地震による直接の被害を受けたものだけをピックアップすることになった。それでも全体で数百冊におよんだのだが，修復に向けた調査で判明したのは，破損の隠れた要因となっていたのが経年劣化であったという事実である。言い換えれば，ケーベル文庫における，他の多くの蔵書も，すでに強い衝撃に耐えられなくなっている可能性が高いと推測される。その意味で，保存修復の対象となった10冊は，たしかにもっとも状態のよくなかった一群ではあったのだろうが，しかし，「災い転じて」の部類であったともいえる。

残念だが，おそらく今後，ケーベル文庫を含めた，貴重図書，準貴重図書を修復する機会は，このままでは二度と訪れることはないだろう。附属図書館では，そのための予算を独自に措置することができないからである。

問題は山積しているが，何とかして蔵書を数十年，数百年の先に伝える使命をはたせるよう努力したい。本稿がそのための一助となればさいわいである。

最後に，落下・破損した資料の整理に始まり，予算の獲得から修復作業の手配まで奔走していただいた田中朱美閲覧第二係長（当時），保存修復のじっさいの作業にあたり，これまで漱石文庫，『種の起源』の修復のさいにも的確で配慮の行きとどいた対応をしてくださった株式会社 Conservation for Identity の飯島正行，浅沼真寿美両氏，そして関係者の方がたに記して謝意を表したい。

参考文献（発表年順）

- 久保勉訳編『ケーベル先生随筆集』, 岩波文庫, 昭和 3 年（1928）
- 幸田延子述「私の半生」,『音楽世界』第 3 巻，第 6 号，昭和 6 年（1931）
- A Catalogue of the KOEBER Collection, Tohoku Imperial University Library ＝『本館所蔵 特殊文庫 洋書の部 ケーベル文庫目録』，東北帝国大学附属図書館，昭和 18 年（1943）
- 和辻哲郎「ケーベル先生」，近代日本思想体系 25『和辻哲郎集』，筑摩文庫，昭和 49 年（1974）所収（初出は，弘文堂アテネ文庫 16，昭和 23 年（1948））
- 久保勉『ケーベル先生とともに』, 岩波書店, 昭和 26 年（1951）
- 小松美沙子編『ラファエル・フォン・ケーベル 9 つの歌』，音楽之友社，平成 4 年（1992）
- 夏目漱石「ケーベル先生」『漱石全集』第 12 巻，岩波書店，平成 6 年（1994）
- 角倉一朗「講演『ケーベル先生とその時代― 1997 年 10 月 7 日　奏楽堂―』」,『東京藝術大学音楽学部紀要』第 23 集，平成 9 年（1997）
- 古嵜靖子「音楽家・哲学者，ラファエル・フォン・ケーベル」［CD］『Raphael von Koeber Neun Lieder ラファエル・フォン・ケーベル 9 つの歌』，音楽之友社，平成 10 年（1998）
- 小野和夫「点描・百年史 ケーベル先生と東北大学」,『東北大学百年史編纂室ニュース』第 3 号，平成 11 年（1999）
- 松井好次「ケーベル文庫と『9 つの歌』」,『東北大学附属図書館報　木這子』Vol. 25, No. 4（2001）
- 小川知幸「漱石文庫の保存修復― A Restoration for the Books of SOSEKI-Collection ―」,『東北大学附属図書館報　木這子』, Vol. 31, No. 3（2006）
- 梅溪昇『お雇い外国人　明治日本の脇役たち』，講談社，平成 19 年（2007）
- 関根和江「ケーベル先生の『シエルツ』――明治 31 年の音楽会」,『東京藝術大学音楽学部紀要』第 33 集, 平成 19 年（2007）
- 小川知幸「歴史資料のコンサベーション―漱石文庫の保存と修復について―」,『東北大学総合学術博物館ニュースレター Omnividens［オムニヴィデンス］』, No. 36（2010）
- 片野勧『明治　お雇い外国人とその弟子たち』, 新人物往来社, 平成 23 年（2011）
- 小川知幸「『種の起源』初版本の寄贈と保存修復」,『東北大学附属図書館調査研究室年報』第 1 号，平成 24 年（2012）
- ケーベル年譜
（http://homepage2.nifty.com/koeber/nenpu.html）

（おがわ　ともゆき，学術資源研究公開センター・
総合学術博物館助教，附属図書館協力研究員）